

『サウンド・オブ・ミュージック』は実話だった

三 春

オスカー俳優クリストファー・プラマーの訃報に驚いた。様々な映画を通じて見知っていた老名優があつた『サウンド・オブ・ミュージック』のトラップ大佐だとは知らなかったからだ。映画が封切られたのは半世紀以上前でプラマー氏はまだ三〇代だから、様変わりして当然なのだが、私の記憶には映画のトラップ大佐の顔しかなかった。

そのころ私はプロテスタント系の中高一貫校に通っていた。自由な校風で、『風と共に去りぬ』も『戦争と平和』も、『アラビアのロレンス』も『ベンハー』も、校外授業としてロードショーを鑑賞させた。『サウンド・オブ・ミュージック』（ロバート・ワイズ監督、二〇世紀フォックス配給）もその一つだ。

ところで、この映画が実話に基づいていることは意外に知られていない。マリヤもトラップも実在の人物で、家族合唱団のことも、ナチスに抵抗して亡命したことも、すべて実際の出来事だ。

トラップ大佐こと、ゲオルク・フォン・トラップはオーストリア海軍の退役軍人だった。最初の妻は若くして他界し、家庭教師マリアとの再婚が一九二七年。ゲオルク四七歳、マリヤ二二歳、先妻が残した子供は一六歳の長男から六歳の五女までの七人だ。

一九三三年の金融恐慌によって破産した一家は、生活のために歌を披露して人気を博し、「トラップ室内聖歌隊」としてヨーロッパ各地を巡業した。

結婚から十一年後の一九三八年、ナチス・ドイツがオーストリアを併合。ナチスに与しなかったゲオルクはヒトラーの誕生日パーティーで歌わされる段になって亡命を決意する。幼い子供を連れて山越えの場面は特に印象深い。実際には汽車で亡命した。幼かった七人の子供たちもすっかり大人になり、あの数々の名曲とはイメージが合わない。主題曲 *The Sound of Music & Edelweiss* ちよもかぐやく、*Sixteen Going on Seventeen & My Favorite Things & Do-Re-Mi* なむれちよ子供たちの愛のこぼれ 抜きでヒットしなかったらどう。

因みに、大赤字を抱えていた二〇世紀フォックスは、この一作で復活したそうだ。